



人の口から人の心に伝える ～Team Sendaiの伝承活動～



宮城県仙台市 Team Sendai
鈴木 由美

1 伝承活動を始めるきっかけ

仙台市職員などの自主的研究グループ「Team Sendai」（ちーむせんだい）は、職員同士の学び合いや市役所内外の人たちとの交流による資質向上、ネットワークづくり等を目的として、2010年9月に発足しました。その半年後に東日本大震災が発生。それぞれが災害対応業務に追われる中、自分の部署以外でどんな現場対応が行われているのかわからず、先が見えない不安を抱える職員も少なくありませんでした。そこで、次の災害に備えるためにも、まずは災害現場を知ることから始めようと、翌年1月から職員への聴き取り調査を開始。さらには、職員の体験を職員同士で聴き合う「語り部の会」を開催し、伝承活動にも力を入れることとしました。



第3回語り部の会（2013年9月12日）

2 原点となる災害エスノグラフィー調査

職員への聴き取りは、「災害エスノグラフィー調査」（以下「調査」）という手法で行っています。これは、災害対応に当たった職員に2～3時間かけて当時のこと

を丁寧に聴き取ることで、将来に向かって残すべき教訓や他の災害にも活かせる知恵などを明らかにし、その場になかった人にも追体験・共有化ができるようにするための調査手法です。

2017年からは、本調査の第一人者である常葉大学大学院の重川希志依教授や同大学の田中聡教授、東北大学災害科学国際研究所の佐藤翔輔准教授との共同研究（2018年～2020年までは仙台市も事業化）にまで発展し、2022年8月末現在で聴き取りした仙台市職員は99人（仙台市職員以外も含めると106人）にもなりました。



元宮城野区長への災害エスノグラフィー調査
（2018年9月18日）

3 体験や教訓を伝える独自の伝承プログラム

私たちは、調査により音声やビデオで記録した2～3時間の内容をどう伝えるかがとても重要であると考え、試行錯誤を重ねました。2016年から、記録をもとに、冊子や朗読、災害シミュレーションゲーム「クロスロード」などの伝承プログラムを次々と作成し、体験者本人を招いての「本人語り」やワークショップなどと組み合わせ、イベントや出前講座等で紹介してきました



朗読イベント（2021年2月23日）



宮城大学出前講座（2022年7月13日）



小千谷市職員研修（2021年10月11日）

た。また、新型コロナウイルス感染症の影響により、対面開催ができなくなって以降は、イベントのオンライン配信や被災地からのオンライン中継などにも取り組み、遠方の方々にも気軽に参加していただけるよう工夫しました。2016年以降、市役所内外への出前講座や伝承イベント等は計40回となり、延べ2,314人に仙台市職員の体験を紹介したことになります。

4 伝承に際しての2つのポイント

これらの企画を考える際、心掛けていることが2つあります。

ひとつは、「人の口から人の心に伝えること」です。災害伝承の方法には、公的な記録誌や報告書をはじめ、写真集、記録映画、モニュメント、震災遺構など、さまざまあります。しかし、どんなに素晴らしいものでも、「作って終わり」では決して伝

わりません。人の口から直接相手の心に伝えていく必要があります、そのための場を継続して作ることがとても重要だと考えています。

もうひとつは、「**実感を伴う伝承方法で伝えること**」です。現在、仙台市職員の4割が、震災後に入庁した職員です。年々増えていく未体験者に当時の状況をイメージしてもらえるように、写真や映像、資料などをできる限り取り入れリアリティを高めることや、BGMを効果的に使い心情に訴えかけるなどの工夫を凝らしています。

5 今後に向けて

災害対応業務は多種多様であり、例えば同じ避難所業務をとっても、避難所により、また、担当する職員により異なります。東日本大震災から11年が経過していますが、今後も生活再建支援や心のケアなどの対応は続くことでしょう。そこで、「震災のその後」についても記録し、残し、伝えていく必要があると考えています。

調査において、当時、多くの職員が、阪神・淡路大震災を経験した神戸に学んだと言います。東日本大震災を経験した仙台市職員にも、11年分の体験が蓄積されています。それらを私たち独自の伝承方法で少しでも多くの人たちに伝えることで、防災や減災に貢献したいと考えています。